御伽智恵鏡

立野藤次郎編

全

K289
TA15
コ1至

K289
TA15
コレ

御智恵競仙

帝國圖書館藏

智恵競自序

昔ハ仙人ハ龜の如く懐へ首を縮め清天地の戯場を觀るに。黍一炊の夢の世も曾褒ゞ譽たる錢さへ有ば仙境則ち美なるべし。足なくして一筆で走り翼なくして車で飛せ思ふ所へ麻姑の手の届くゞ如く。自由自在。霞殘喰ひ虹を呑より。左慈ゞ真似して手を打けば。洗ゝ鱸ゞ皿ゝ躍り。三弦箱ゝ駒ゞ出て。沈んだお客を浮されば張果も瓢を捨て

や逃ん。夫神理い聲なし。言よ因て意を寫し。文字よ緣て音を圖る。祕術密法と雖も書にせざれば殘らざるべし。昔乾坤の諸仙等が昇平の樂國よ集り。伊丹の諸白よ醉て遊び戯れ駄晒落が竟よ一卷と成て予が家よ傳ふ。之を櫻木よ移さば。能く童蒙の樂ミを去らんと筆を染れば曩よ撰ぶ御伽玉手箱と如事枕の嗣篇と成りぬ。

文政十一年十月　立野平侯識

目録

一　小さき穴より大入道を出ス法
二　新發明化物屋舗
三　座舗へ妖怪を出ス傳
四　達摩漬
五　龜の占ひ
六　聾よ樂の音を聞る傳
七　火鉢の中より鶴を出ス法

八 骨牌を細かゝ切雜て四枚重ゝ並べる法
九 板の上ゝ鷄卵を立る傳
十 蠟燭を自然と空中ゝ點る傳
十一 四角なる紙を七曜の紋ゝ切る法
十二 吸筒の中へ漆を塗る工夫
十三 夏の夜庭中へ雪の景色を現る傳
十四 西瓜燈籠附茄子提灯
十五 青竹の螢籠

十六 瓢簞鯰
十七 鴛鴦の交ひ比翼の燈
十八 行燈へ自然と火の燈る傳
十九 鉄火を握る傳
二十 水の上ゝ文字を浮る傳
廿一 盆種の草花ゝ大輪の花を開かゝむる法
廿二 菊漬
廿三 渦巻漬

廿四 青物を石ゝ化する法
廿五 桶の中へ玉子を納て雞ゝ孵す傳
廿六 役者の名簿を當る傳
廿七 奇妙希代妙不思儀當て物の法
廿八 七玉拳
廿九 交拳
三十 雷り拳
卅一 火を點したる蠟燭或ハ大石抔を水の上ゝ浮する傳

卅二 稿まて酒壜を釣る傳
卅三 細工玉子割烹の傳
卅四 細工大根割烹の傳
卅五 兎の角を軟かゝする法
卅六 角類を紅色ゝ染る法
卅七 扇の面ゝ蝶の戯ぶる傳
卅八 掛物ゝ書たる書画夜る自づゝ光りを發する法
卅九 傘より雨を降せる傳

四十 座敷庭等へ三日月を出す傳
四十一 金の色を善くする法
四十二 下品の煙草を上等品ゑ直し法
四十三 水を遠く打つ柄杓の造法
四十四 竹を輪違ひふ切る法
四十五 座舗へ大風雨大雷り稲光りを出し傳
四十六 夫婦茶碗の傳
四十七 扇子ゑ玉子を積む傳

四十八 通ひ扇子の傳
四十九 白紙ゑ煙りを吹掛け文字を現ハし傳
五十 俄ゑ壁の上塗をする傳
五十一 八寸釘を舌へ貫す傳
五十二 座敷へ天狗を出し術

目録終

御伽智恵競

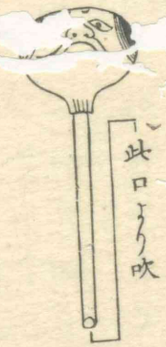
御伽智恵競

立野藤次郎　編

一　小さな穴より大入道をいぶす法

是ハ酒席の滑稽にして藝無猿の哂落よハ至極可笑き思ひ付き也。先づ白き護謨製の大きな罩丸笛を買ひ口の笛を抜去て大入道の面ゝ或ハ何体ゝ画を画き細き一尺許の竹の中へ押込き口の部を糸にて緊くはび。只今此お座敷へ妖怪を出て御覧に入れ外

と云ふなり。障子のれか。或ハ節穴より竹の小ゝの見ぬ様ニ。障子の蔭から勢ひよく呼氣を込て吹ば。丸く膨がりを大入道が現れ出て一興ゝ。若し護謨玉無ければ。

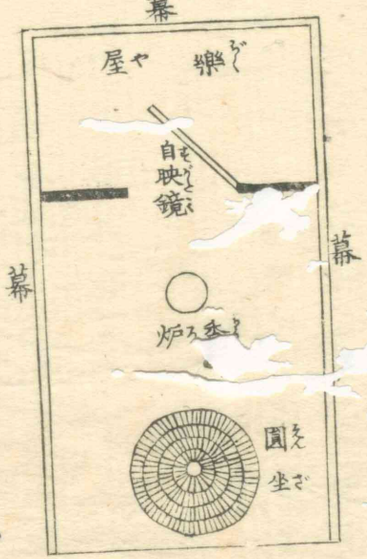


提灯の骨を剥して。面を書き薄く蝋を刷て用ふるも佳なり。

二 新發明化物屋舗

親父の臍を喰り。母親の臍を嚙る。楽仲間六七名集り。時ニ糸様昔ゝ物語りと云遊戯を行ふ。眞實ニ化物が出んだらうか。何其様な事ハ嘘ハニ今ハ開化だから其な古風な遊を行ねへ。己が西洋新發明盍傳怪物屋舗と云工夫が有ふ。今夜試験かゝ拙ぶ宅へ同ぶ御来臨へどうだ。面白いと兼約の中時刻を量て推かけをば。其事の爲休く。づ道具立を幅狹く長さ暗室廊下等の。正面ニ自影鏡を据て

へ前へ香爐を置き。宜の所ゑ圓坐を設け。周圍ゑハ物凄しき景色を画いとる幕を張廻し。其他怪き飾附ありて寂寥と物凄き形容なり。主サア誰でも者を順々ゑ彼の暗室の圓坐の上へ行て立て。居玉へと闇を出し。サア皆ゲ一本宛引をく。



闇して一番二番の順を定め。一鉄様君ゲ一番ゴ。サア行ッ皮切を為り玉へ。鉄何ゴ已ガ一番だ大變ゴ奈何も仕方ゲねへ。怖々闇室の内へ這入り。可怖者見さに圓坐の上へ登て鎧ゑ向へバ。但円坐の上へ登られハ見つゴ。香爐のより青白き火ゲ陰々と燃立ち。我ゲ姿ハ映らで。初ハ小さく怪き物ゲ朦朧と現れ。漸次ゑ大きく成ゑ隨い妖怪の姿ゲ現然と怖ーー。既ゑ飛もらんとする様子ゑ身

の毛も悚ちて堪わ難ねと云ふ暗室より
逃出し助けて呉し。大変ど眼を廻した。
早く氣附を飲せね。マー顔へ水を吹掛ね
へ。大騒ぎ。

此傳ハ次篇ニ詳らかニす。看官嗣出を待
て其法を悟了玉へ

三

座舗へ妖怪を出を傳

鉄アく氣ガ附ト。今のハ趣向ハ巧ざが
真實ニ怖しくつて。女子供ニ見せ〻者な

ら魘て煩うといけねへ。已ガ一番妖怪を爲
て見せ様く屏風の蔭へ這入り。白こ浴衣或ハ
繻絆を天窓ゥら被り。鼻紙ゥて

の〻く奇体

面を拵へ。眼と鼻に孔を穿て顔へ貼り。女の髪を顔の両方へ並し。黒を水櫛を口に咬へ。指の先へ手袋を着て爪を長く見せ。線香を焚て烟を出し。屏風の上から現れ出で。おどけへし。皆人を馬鹿にしさ。

四 達摩漬

諸に香の物の味能きは内室の締が佳と云り。夏日。瓦漬瓜の季成を二つに割り。中實を取去り。甘塩にして押漬にする時は瓜の形ち

の如く。手遊の達摩に似り。故に名く茶漬の添に淡薄として佳し。空味にして云く。其皮剛くして中に禪味を甘んぜる者か甚麽さん。

五

(一) 亀の占ひ

(二) 碁石でも銭でも圖の如く並べ。玉

(三) 手箱に嗅錢の法が出てゐるが。嗅

(四) で當ちやゐ面白く無へ。手トお霍さん。私が向

(五) ふを向て居るが。でも一個撫くつて元

の通りに為て置なり。手を着ぬに此度中て見せるからと後向に成バ。翟ヲヤさうでにか。其なら斯と隨意に一個撚り。能うムい升よ十て御覽なさい。ドレ〳〵此方を向き暫く考へ是だらう如何。奇妙ど。どうして知るだらうね。側に居る人アハヽヽ。此傳い次篇に出に

六

聾者に樂の音を聞せる法

聾に三絃或い太鼓の音を聞せること。女烟管の吸口を咬へさせ。雁首を三絃の皮の上へ載て彈ど常の人の聞に変ることなし。太鼓も同ト。

七

火鉢の中より鶴を出に法

葯弱玉を薑擦して卸し。紙の裏表へ刷き。其紙を鶴に折り他の紙にて包み。火鉢の中へ打込ど即ち包し紙い燃て灰に成り散ど。鶴計りい焦だして。形ち瞭かに火中に殘るべし。看客云く。灰吹ゝら蛇ガ出るのい聞たガ。火鉢から鶴ガ出さのを。未ど新聞紙で

も見と事がねへ。是こそ新發明ぞ。

八　骨牌を細かゝに切雜て四枚重ゝに並べる法

先づ骨牌を四十八枚拵へ。是を十二枚宛四つゝに分ち一二三四五六七八九十馬切と四枚宛書き。順に一組宛重ねて手に持ち。何程でも隨意に細かゝに切り。裏返して四枚宛三側に十二枚並べ。伏せ。又其上へ初めの如く重ね並べ。順に十二枚宛四重に並べ終り。伏たる骨牌を覆へして表を出せい。皆四枚重に同じ字ぞ揃ふこと奇妙也。但下より上へ〳〵と切るべし。中を拔て切る時い入雜りて揃わざるべし。又骨牌の數い六枚にても二十四枚にても其理変る〳〵無し。是い中古或る數學の先生ぞ工夫したる遊びにて。至極面白き戯れなり。

九　板の上に鷄卵を立る傳

王子の尻に食塩を少許り着て立れば。立と

と奇妙也其る事い古い。塩ちんぞを着ちやの穢細工だ已が爲るのを見給へと。鷄卵取て暫く振廻し。極めて水平なる机の上よ眞直よ立れば。倒ることなし。熟ふらふ。「イツハ」不測ど奈麼く譯どらふ。「汝等い窮理を知ぬつゝら行ね。「ナニ」胡瓜ら知ら無くつてよ。花落でも水虎でも。「ベラボウ」寛棒めつハ百屋て販る胡瓜ドやのねへ。窮理と云のい物の理を窮め學問の事ど。「ウン」其を穴箇敷ことゝ。知ねへ

降參ど。「ドウゾ」先生只顧御傳習を希ふ。「ヨシ」其を教て遣ふら次篇を見玉へ。

十

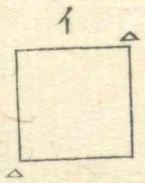
蠟燭を自然と空中よ燈を傳

東西お目通りよ据置き外さる燭臺の蠟燭只今口上よ隨がひまして自然と空中よ舞上り。暫くい大千世界を照し外之が即ち弘法大師眞言秘密の蠟燭よて。彌陀の御來光と稱ん。御眞心の御方い愷んで御拜のちれまへやう

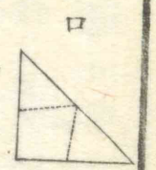
傳に云く。極細き絲針金鉄物屋にて賣る鍼を着て天井裡に挿し。一端を蠟燭の心に通し。下にて曲て拔ぬ樣にして燭臺を外せば。針金い灯の光にて見て。恰も空中に燈りたるが如し。

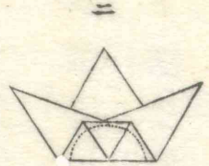
十

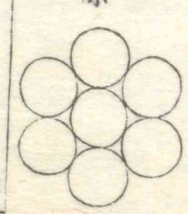
四角なる紙を一ッ刀にて七曜の紋に切る法



イ圖の如き四角なる紙を。上の△印の角を取て。下の△印の角へ斜に折附れば。ロ圖の如し。是を中の二つの筋の通りに。三つ等分に折へハ圖の如し。○此竪筋の通りの所にて印の横筋の如く三つ等分に折ぞ。ニ圖の如し。此の如く成さるを○印の丸の如く切る也。但上に重りさる方い。丸の折目に附く所を五六厘宛殘して。三所共に切るべし。即ち







[水]圖の如し。若し此處に注意せざれば。七曜七つに離れ破落々々に成るべし。

[十二] 吸筒の中へ漆を塗る工夫

先づ漆の中へ大豆十四五粒許り入て搖廻す。漆に能く糝着さる時取出して吸筒の口より入れ筒を能く振て豆を出せば。豆に粘さる漆を皆筒の中へ移り着くべし。又漆を糝して納れ。振こと幾回も爲ば。漆を群て筒の中に行亘るべし。偖之を風呂に納れ乾かせば即ち筒の中漆塗と成る也。

[十三] 夏の夜庭中へ雪の景色を現に傳

夏い又冬が増ぢやと申しそり」俳家の滑誓信たる弐吉兵エさん斯暑くッちやの體の置處に困るぢやの無へ。左様々々實に酷暑避易からぢだね。芝浦の鮮魚で汗でも流しや正ゥ。併し夫も御散財ざから。何と宅で向嶋の雪見と云趣向で。極手軽く飲うぢやの無ゥ。有難へ夫ぢやの道具立を都て君に

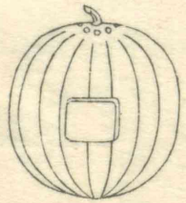
御依賴だ。宜うございまして萬端僕よりお任せなせ〳〵。先づ庭前程能き所より。桶の輪よりも竹すて築山の形ちを拵へ。山の姿い時の見合せ氣轉あるべし。新しき細見の蚊帳を裡返して覆せ。又い暖帳よりて樹木石燈籠等思ふ〳〵作り物有て。綿を海蘿よりて雪の積りたる如く貼け。綠(菓屋)子よりて賣ホ或い白紙を細く切て蒔散し。夏の夜の月影。又い石燈籠の灯より見バ取分け涼く。春より知られぬ花で咲ける。奈も云れぬ景色でい無ろ。客答成程左樣でござり升。

西瓜燈籠 附茄子提燈

形ち能き西瓜を撰ミ小刀よりて近江八景。或い松島抔の景色を彫り。小刀の端を白圖の皮の所近入る如く後へ穴を穿け。中の赤肉を刳出し去り。白皮より着さる肉い蛤貝よりて能く搔出し。頭より小さき煙出しの孔を四ツ五ツ

表

裏



穿け。内へ灯を點して軒端へ釣垂し置き。夏の夜よい涼しき景物なり。但此燈籠ハ白昼水よ漬し置けば。幾日も用ひらるゝべし。

大なる茄子を前法の如く後へ穴を開け。中の肉を剜去り火を灯し頭よ糸を着て提げ歩行べ。青色玻璃の提燭の如し。

十五 青竹の螢籠

太き青竹を截て筒と爲し。内を小刀よて薄く削ひ。氣取り能く藤蔓よて縛て提る様よし。螢十匹許り放ち入れば。光り外へ透りて面白く。暑中の進物よそ氣の利さ者なり。

十六 瓢簞鯰

細長く恰好よき瓢簞を取り。中の種を出し。圖の如く紙よて鰭と髭を拵へ。鯰の形ちよ彩色し。中へ小さき鯰を四五匹入れて座敷へ持出し。畳の上よ置べ。中よて鯰の動くよ隨ひ飛跳て。酒席の晒落よそ

甚だ興あり。

十七　鴛鴦の交ひ比翼の遊び。

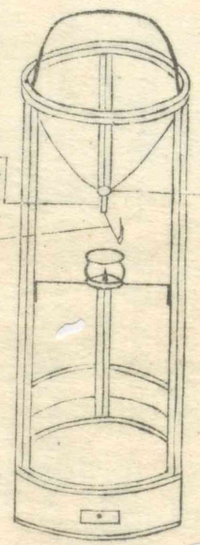
小児　碁石を持て●○●○●○の如く白黒六個を一個隔て並べ。イ王様是を二個宛一處より取て。三度より交換て○○○●●●斯成るが汝より出来るか。王ウン出来無つてよと。先づ假より○イロハニホヘトチリヌルヲ○○○○○○○と心より暗記し。○ホを取て○ヘ容れ○イロを取て○ニホの跡へ容れ。○ハ○ニを取て○リ○ヌへ容れ。ヲラ奈何ど出来さらう。夫トやの今回のを為て見ねへと。●●○○●●○●●○○の如く並べ。是を三個宛一所より取て三度より交換て斯成ば。○○●●○○●●○○●●是りやの出来るか。果をハ些と難物いなと暫く考へ。前の如く假より○イロハ○ニホ○ヘトチリヌルヲ○わよたれそと暗記し。○リヌルを取てわ○よへ容れ。○イロハを取て○リヌルの跡へ容れ。○ニホを取て○たれそへ容れ。ソラ奈ど熟から

う。「ヨレ」其なら今回滅法難事のを出にう
爲て見ねへと●●○○●●○○●●○○
前法の如く並べ。是を四個宛取て三回よ交
換へて斯成るが。○○○○○○●●●●
●是ゆの出来る。ドレウン出来さうだが出来
ねへ降参ざ。其ドやゆの教て遣るゝ次篇を
見玉へ。

十八

行燈へ自然と火の燃る傳

樟腦玉よ附水を挾こ。附木の硫黄へ火絮線香を撚り着て線香の端へ火を着け置い。漸々こ火移りて自然と火の燈る也



火絮線香の製法ハ。糊入紙を能く揉み黒焼こして海蘿こて固め。太さ線香の様こ拵へ附木を細く裂て硫黄の所を挿込こ。日こ干て乾を也○樟腦玉の製法ハ。樟腦を細末こして海

羅にて丸く固め。附木の末を挾で左右へ鉄線を通し穴を穿け置き。干し固めるも圖の如し

十九 鉄火を握る傳

火箸を火に焼て。眞赤に成りたるを右の手に持ち。左の手の中へ悄に小枕へ納る道具を隠し持ち。小枕の穴の中へ入れると火箸を通すべし。尤も手練を善くすれば。看客肝を潰すこゝろだ。

二十 水の上に文字を浮べる傳

烏賊の甲を細末にして水に溶き。紙に刷き。字にても画にても書て水に浮し。楊枝の端にて静に紙を突き沈めすれば。書画を水の上に残りて妙なり。此法外の藥より大に優りて佳し。

廿一 盆種の草花を大輪の花を開かしむる法

盆種の草花殊に水仙の類をして。大輪の花

を咲かしむるよへ。硝石三十二匁。食塩十六匁。ポットアシ八匁を雨水四合ヨ溶し。盆草を室ヨ納る時節より。之ヨ水を與ふる度毎ヨ。右の藥水十滴より。十二滴迄を加へて灌漑すべし。翌春花の出るヨ及んで。輪大ひヨして色の美あること妙なり

廿三 菊漬

黄菊の花計り摘み取り。食塩三外を水三外ヨ煎じて一夜冷し置き。取出し押漬にして貯へ置き。用ヨ臨んで塩出しをして菊味ヨ爲ヨ新鮮の菊ヨ替ること無く香ひ深し

廿四 渦巻漬

胡瓜の末の頃番椒を澤山入れ。甘塩ヨ壓を掛て漬置き。十分ヨ水の上りたる時二つヨ割らず。竪ヨ庖丁目を入て。中實を取り。一日天日ヨ干て能く冷し。片端より緊くと巻き。竹の皮を裂て解ぬ樣ヨ巻き締め。糠五升ヨ塩一升を合せ澤庵漬の如く漬込み。

緊りと押を拭け。十五日程歴て取出し。糠を洗ひ結目を解て木口切まれば。◎の如し。味辛く甘くして歯切れ佳し。

廿四 青物を石と化する法

水一升に生明礬二十匁を溶し。其中へ青物を入て煮取出して日に干る也。豆腐い能く水を絞り。色を着て煮るべし。

廿五 桶の中へ玉子を孵て鶏に孵を傳

先づ天井の下へ天幕を張り。種廻し一人。雞二三羽袋に入れて持ち。悄に二階へ隠れ居り。二階の根太板へ穴を穿け置く也。太夫い座敷に出で米炊桶一つ借り。看官の方へ向て中を改め見せ。偖て玉子を桶の内へ二三個入れ。只今此玉子を庭鳥に孵して御覧に入れ申と云ふ。桶を持て立ち上り。「ヤット」掛声して桶の頭の天幕にて隠る程に差上れば。二階に隠れ居る種廻しい。袋入の雞と玉子と入換るなり。偖て桶を下へ卸して前

つ置き。掃より雞を一羽宛出して見せるべ

志。

其

役者の名簿を當て傳

先づ机の上へ文箱を載せ役者の名簿三枚を拵へ譬べ芝翫菊五郎團十郎と三枚の簿に名を書し文箱と共に客に渡し隨意に一枚文箱の中へ納れさせて受取り。元の如く机の上に載せ誰の名簿なりと中る也

傳に云く。三枚の名簿を各目方を違へ拵へる也。團十郎は未の方を重くし。菊五

郎ハ頭の方を重く。芝罰を平等ニ目方どもら無く拵へ置き文箱を受取る時重みの加減を量りて當るなり

廿七

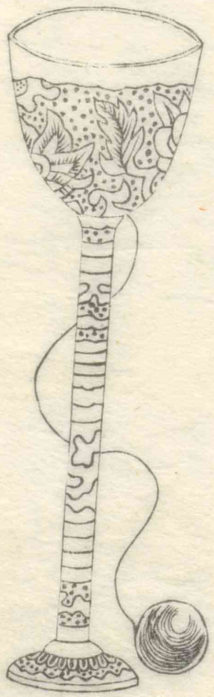
奇妙、希代、妙、不思儀當て物の法

圖の如く札四枚へ春夏秋冬。或ハ仁、義、禮、智。或ハ龍虎梅竹何にても字を書きて並へ後ろ向ニ成り。何れの札にても一枚人ニ撚くらせて。元の通りニ並べ置きよと云バ。此方を向き此札なりと當るなり○此傳い

次篇ニ出ル。

廿八　七玉拳

七玉拳ハ。一時雖波ニて流行せし酒席の遊興ニて。小兒の持て遊ぶ。湯本細工の七玉酒盃を唐桑花梨紫檀等ニて作り。彼玉を五



木酒盃玉の圖

遍の中より一遍七ひ入るゝ。又三遍の中より一遍七ひ入るゝ。何れにても最初の極に依て。双方替るゝ玉を酒盃へ七ひ込こ。勝負を爭ふなり。尤も七ひ損じたる方負にて酒を呑せらる酒席にい可笑き戯れなり。

廿九 交拳

初を互に常の如く一拳。本拳にて打ち。或ハ孤にて二拳目ハ出拳にて指を出し。三拳目ハ又本拳。四拳目ハ出拳。五拳目ハ本拳と。交雜に打合ふ内に入。紛れて出拳の所に本拳を出し。本拳の時に出拳を出せば負なり。但本拳も出拳常に勝負い同じ。此拳い至て可笑き者にて。酒席に尤も興ゆり。專ら京攝にて行はるゝ也。

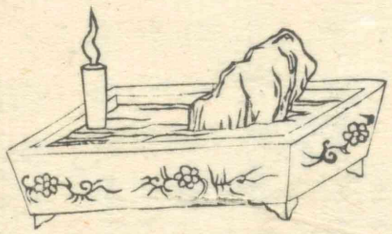
三十 雷ゝ拳

西の方にゝの黒雲が舞下り手を翳して空を下る仕方。両手にて雲の暑いか。暑き身振雷りさんでを雷いいな。大鼓を叩く真似をする娘め臍わくせ。女の子にて臍を押へ。取られるなチヨくンガヨイと三

つ打ち孤拳。

世一

火を点したる蠟燭或い大石抔を水中ゟ浮さる傳。



水鉢の中ゟ硝子の臺を拵へて水を入れば。同し色ゟて少しも知れぬ。其上ゟ石或い蠟燭ゟ火を點し立置けば。何れも浮さる如く見て。見物甚さ不思儀がる者なり。

世二

藁ゟて酒陶を釣上る傳

酒壜の口の廣さに見合せ藁藁の堅さ所を折て挿入れ釣上れば上る也。

世三

細工玉子割烹の傳

立花

燒玉子を竪ゟ糸と軽く八通り拭け。能く縛りて筋と着け。紅ゟ山梔子を加へ。燒明礬少し入て彩色に。葉い柚子ゟ蜜柑か金柑の葉

を着て佳し。

茄子

燗玉子

燗玉子して形ちを作り。藍紙にて色を着る。

笠い卵黄を取て能く掻回し。小皿に油を敷て焼き。並い巻玉子にして用ふ。

松蕈

淡雪

玉子の白を鉢に納れ。茶筌にて掻回せば泡を生じ。之を沸湯の中へ入れば。其

儘固りて雪の如し。即ち丼鉢に容れ水に浮し。漿を甘味に拵へ點て用ふべし。

四角玉子

燗玉子の皮を剥き。四角に板を當て糸にて縛り暫く置い。癖を付て四角に成るなり。

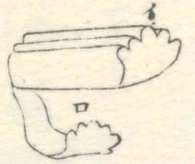
黄返し

先づ玉子を一個破て。黄と白とを分け。別に一個の玉子に穴を穿け汁を吸出して空卵と爲し。偖て先へ黄と漏斗にて注ぎ込み其中へ白を注ぎ入て孔を塞ぎ燗

れば。黄白入れ換つて黄返しと成る也

四 細工大根割烹の傳

先づ大根を丸の儘にして皮を剥き。立に二つに割り。圖の



イの如く筋を截て後ち。横に㋺の如く剥い花瓣と成る。之を暫時水に漬り。㋩の如く十文字に重ね揚子にて留め。或い竹串に亦差ひ違ひに二十四枚重ね

れば㋥の如く牡丹の花と成る。花瓣の端を紅にて「ボカシ」に深め。葉い胡蘿蔔の葉にて氣取る也。

亂菊

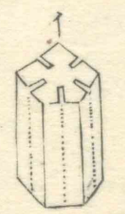
剥き様牡丹に同じ圖のイの如く横に木口より廻し剥て。竪に二つに剪めば花瓣二枚と成る。是をロの如く上四枚下五枚に重ね心を揚子にて留る也

八重菊

圖の如く木を太く梢を細く。凡く

氣取り堅く筋を截て刻みを着け。水口切よして重ねれい即ち八重菊と成る

桔梗



梅

櫻

桃

先づ㋑圖の如く五角よ切り。㋺の如く花の刻みを着け。水口切よすれば桔梗と成る。桃櫻梅皆此切様と同じ

朝顔

先づ㋑の如く氣取り。㋺の如く花の形ちよ切り。暫く水よ漬け。庖丁の峯よて外へ撫で裏へ返し。葉い葉の葉を切て形ちを拵へ蔓へ冬葱へ鉄線を通し態を付るべし。

廿五　鹿の角を軟うする法

鹿の角を軟うよして細工よ遣ふよい。鰡の骨よても肉よても少し入れて煮れば。軟ぐ

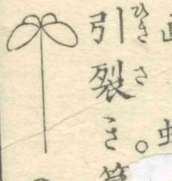
こと妙なり。

廿六 角類を紅色に染る法

磁器にて紅を梅醋に溶き。紅一匁に付き生焰硝五分入れ。炭火に拭け。紅煮へ上りさる時象牙或ハ鹿角馬骨。鯨骨の類を入れて染れバ。紅色甚だ美なり。

廿七 扇の面に蝶の戯るゝ傳

鼻紙を短く引裂き。箒の掃擱を一本取て。其紙を撚りて



の如く結着け。扇の骨の間に入て。出して。下にて掃帚の毛を撚れバ。扇の面に戯るゝが如し。尤も夜ハ燈火遠き所にて遣ふべし。

廿八 掛物に書さる書画夜自ら光りを發する法

烏賊の墨を取て器物に貯へ。陰乾にして醒氣を去り。能く乾かして臙脂と一所にして。至極の上墨と摺り雜ぜ。念佛にても題目にても或ハ神佛の像にても書き。香炉に抹

香を太く盛りて。五寸許間ざを隔て焚くべし。火能く移り時見れば。抹香の火と烏賊の墨の光りと映ドて。光明を放つ事奇妙なり

卅九 傘より雨を降せる傳

傘の頭より包みてある油紙を解き。針にて小さく穴を幾個も穿て。若其紙へ蠟を熔して一篇刷べ針にて穿さる穴い塞るなり。偖其紙を疊んで水を入れ。傘の頭へ載て紮り付傘を擴げて坐敷へ出で。敷居の上に立て水を包みさる紙を。上の鴨居へ押當て。緊く押着れば。彼の針の穴より水出て。傘より水流れ雨の如く奇妙なり。水の御用心。

四十 座敷庭抔へ三日月を出す傳

人に知ぬ樣に。茶碗と丸き蓋を懷ろの中に隱し持ち。燈火を消し。奥に行き。硫柿を細く裂て火を着け半分過ぎ燃し時に火を吹消し。當しを茶碗の中へ入れ。圖の如く丸き蓋

をれば。明り殘りて三日月の如し。是を坐敷の隅より出せば。右の燼しの火次第に暗くなる時。

恰も三日月の雲間に入るが如し。但庭へ出まゝい銅盥に釜の蓋を用ひ。紙を粗と紡て火を着くべし。

四十一 金の色を善くする法

金器の曇りたるを。刻み烟草の中へ入置べ。

壁さたに如くに成る也金箔の煤を落ふ烟艸の莖を水に浸し其水にて洗ふべし

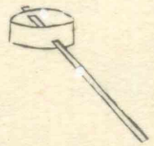
四十二 下品の烟草を上品に直す法

下品の惡烟草い青臭くして飲まくき者也。是を上好品に直にまい。頻に酒を吹掛るべし。山八の鬼殺しにても薩摩の國府烟草の如くなるこく妙なり。

四十三 水を遠く打つ柄杓の造法

水を高く打ち又へ遠く流ん思ふ時常の

柄杓にて漸々三四間より遠く流れぬ者也。柄杓の柄を圖の如く手前下りに作るべし。何拾間さきへ遠く流も亦高く流も自由に流るゝ也。是い或る數寄者の諸侯が塀の外より庭へ水を打と仰ありし時此柄杓を造りしとなり。



四十四

竹を輪違ひに切る法

至極性の能き厚き竹を左圖の如く墨打し竹を鋸にて鋸まして。墨打の如く引切れば ロ の如く成るなり。斯二輪違ひたるを一ッ方にて竹の厚み半分宛殘し一ッ方は内ち。一方は外を切り。

輪を離して目に見ぬ程轆轤にて削づれば ハ のごとく輪違に成る也。瞻の「ケン」抔に瓜或は大根等を輪違に成るも皆此法に同じ。

十五

座敷へ大風雨大雷ゝ稲光りを出す傳

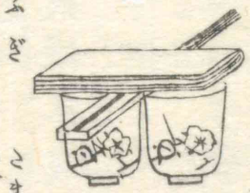
座敷の這入り口へ。障子二三枚建て。其内ゝての藝なり。雨いとゞ箒と両手ゝ持ち。其障子を箒の穴ゝて廻ーながら。音のする程撫で摩り。偖此方ゝて左右の指ゝて障子を爪彈きすれば。雨霰の然ーく降がごとし。稲光りゝ鏡を一面燈火の方へ向て動かゞべ。恰も稲妻の閃めくが如し尤も鏡い大きなるが佳ー雷りゝ碾臼を挽く也。尚ほ強く雷を鳴さんと思ゝゞ障子の骨を握り拳ゝて段々と強く叩くべし。風を吹かするゝ。筵一枚を二つゝ折りて横ゝ持ち。其障子を扇ぐべー。其怖ろーきこと雷電大風雨の如ー

四六

夫婦茶碗の傳

鉄線を圏の如くゝ曲げて。茶碗を両個並べ挾み。上ゝ鼻紙を載せて鉄線を隠ー。扇子ゝ

鉄線



四十七

扇子と玉子と積む法

圖の如く扇子の中央と一つ折り。竹の串を挾さみ玉子と二つ共に吸出して殼卵と爲し。堅き鬢着にて重れ

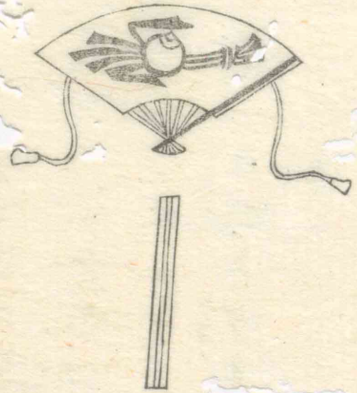
煙管に引掛て持上げ。粘着さ

粘け。竹の串へ挿し込たり

四十八

通ひ扇子の法

扇子の親骨を左右二本とし左圖の如く枚宛合せ。眞中に穴を穿け。糸の通るように溝を彫りて糸を通し。骨を合せ膠にて粘け。要の所にて小骨を通し畳めば。直に糸の通りたる如



く丸る也。即ち糸い左右へ通ひ外開けバ縁の切れさる糸疊めバ連離の志ゞらそとなる。ハリトウ〳〵

四十九

白紙ニ煙を吹掛け〻字を現ヨに傳

大豆を一夜水ニ浸し。和らかに成たる時雷盆ニて擂り。其汁ニて何なりとも白紙へ書を。日ニテて乾かせぎ跡なし。是へ類ヶヨタ葉粉の烟りを吹掛れバ其書たる者鮮明と現ヨるべし

五十

俄ニ壁の上塗をなる法

或い俄ニ客来有て。急ニ坐敷杯壁新らしく塗んと思ふ。砥粉を海蘿ニて解き刷毛ニて壁へ群なく引くべし。即ち能き上塗と成る。若少しく赤色を帶させんと欲せバ。丹土を少し許り加ふべし。白壁ニハ胡粉を海蘿ニ合せ。泥大津を偽るニを胡粉ニ灰墨を少し加ふべし。右急用の働ニて然も手際

よゝ出来る物なり。

五十二

八寸釘を舌ゟ通を傳

圖の如く釘を拵へ舌を挾み。

横の金を咬へて見れば。實に舌へ貫りた

る如く見るなり。

五十三

座敷へ天狗を出に例

先づ大天狗の打扮い。大きなる藥罐を両手

ゟ持ち。文錢二文裏を能く摺て。光る程ゟ磨

き糸ゟ繫ぎて蓋く縁との間ざへ。目の如く

程能く挾み被物を被り。其上へ藥罐を高く

差上げ。天狗の首の如く爲て出る也。座敷ゟ

ハ合圖の人印を結び。行ひをする真似とし

て居る所へ。此方ゟ飛で出ると。人々大ゟ

驚き果ハ大笑ひと成る。又一法を百眼を拵け。曲物を兜金と戴き鈴拵ハ紙にて作り。焼数を四つ貼け摺木を太刀に拵き古團扇を持ち。簑を鉄線にて張を入れ裏に拵へ紅裏の着物を裡返しに被て。緋の衣の如くに見せ。善男の謡を唄ひながら座敷へ飛て出る也。

兜金ハ曲物を墨にて塗る

御伽智恵競 終

明治十四年十二月廿八日出版御届

同 十二月 刻成

編輯人 群馬縣平民 立野藤治郎 上野國群馬郡前橋新町三十七番地

出版人 東京府平民 山岸佐吉 日本橋區檜物町十一番地

多聞式

群馬県立図書館
0665008-9